

《研究ノート》

『プリズン・サークル』上映会 開催報告
- 社会正義を志向するライフ・キャリア教育の研究から

勝又 あずさ (成城大学キャリアセンター特任教授)

1 はじめに

成城大学では全4学部を対象に全学共通教育科目が設置され、科目群の一つとしてキャリアデザイン科目を2006年度より開講している。キャリアデザイン科目では成城学園の建学の精神(澤柳 2015)を念頭に、自分と他者と社会を理解することや、多様な価値観・文化の包摂など、人生全体を視野に入れたライフ・キャリア教育の要素が多くを占めている¹。キャリアデザイン科目の中に「キャリアの多様性と社会正義」がある²。この授業では、「一人ひとりが生きやすい社会を目指し、自他のキャリアの多様性を尊重しながら、自らが社会の当事者とできること」を、対話を通して考える。科目名称にある「社会正義」の考え方はキャリア開発・キャリア教育の領域でも、日本では2020年頃より重視されている(下村 2020、前田 2020、勝又 2024)。今回は成城学園教育研究所の研究助成³の一環で、対象を科目履修生から学内外の学生、教職員、一般に拡げて、映画『プリズン・サークル』の上映会(以下;上映会)を実施し、視聴後には感想を分かちあうといった対話の会を試みた。

映画『プリズン・サークル』は、受刑者同士の対話をベースに犯罪の原因を探り更生を促す「TC(Therapeutic Community=回復共同体)」を導入している刑務所を舞台にしたドキュメンタリーである⁴。TCが対話的であり、またこの上映会においても多様な属性間での対話を重視した。本稿では、映画視聴とその後の対話を通じた参加者の気づきを考察する。

2 キャリア教育・支援における社会正義

キャリア教育・支援における社会正義とは、下村によれば「人々の不平等や格差、それによって生じる分断に対する社会的公平さ。長期失業、格差、貧困、外国人、性的少数者など、非主流の集団に属している人、社会の縁辺に置かれている人、不正義に支援を受けられない社会構造に対して、社会問題の解決に取り組んでいく考え方」と定義される(下村 2020, pp.24-29を引用、筆者

により一部改編)。社会正義では、キャリアの多様性を理解し個人のエンパワメントを高めていく。下村は、現代のキャリア支援・教育に、この社会正義の視点が重要であるとし、3つのプラクティスを示している。3つのプラクティスの第1はすべての層の存在を承認し様々な問題を聴く深い意味でのカウンセリング、第2は個人が自己決定と問題解決を通して自ら人生を切り拓くエンパワメント、第3は仕組みや制度の改善に向けて周囲や環境に働きかけるアドボカシーである(下村 2020, pp.200-205)。この社会正義は、大学のキャリア教育(ライフ・キャリア教育)において学生が学び実践する際にも重要なテーマとなる。

前述、「キャリアの多様性と社会正義」の授業においては次の3つのテーマ、「出産・不妊と特別養子縁組」、「LGBTQとHIV/エイズ」、「ホームレスと生活困窮/社会的孤立」を設定し、生き方の多様性について学ぶ。それぞれ専門家・実践家を招聘し、講義の後は各フィールドを訪問する。本科目の2021年度の履修生を対象に行った研究においては、対象学生の変容プロセスとして次の6つ、1.授業開始時の将来への不安、2.講義を通じた社会問題との対峙、3.他者の生き方や考え方を通じた社会への問題意識、4.現場での実感と課題の再認識、5.自らの視野の狭さに気づく、といった特徴があり、それが6.他者承認を経て自己承認、に繋がる。学生は、社会に向けた戸惑いと内的な戸惑いを交差しながら、視野を拡げ、社会問題と自らのライフ・キャリアに対する新しい視点を獲得し、当事者意識が形成される。やがて、他者承認と自己承認を経て行動につながる事が推察された。この研究の詳細は勝又(2024)を参照されたい。

この授業での対話は学生間で行ったが、例えば世代や環境、価値観が異なる多様な他者と関わりながら社会課題について語りあう場では、それぞれにどのような気づきがあるだろうか。本稿では上映会を通じた参加者の感想に焦点をあてる。

3 『プリズン・サークル』上映会の開催

3-1 開催の目的と概要

上映会の目的は、「キャリアの多様性と社会正義における対話の可能性」をテーマに参加者が映画を視聴し、その後の対話での様々な意見を通して、自らのライフ・キャリアや今後の活動のきっかけをつくることである。

上映会の冒頭には、『プリズン・サークル』監督の坂上香氏（以下：坂上監督）によるテキストメッセージ⁵を読みあげ、その後に映画本編（136分）の視聴、休憩を挟んで20分間の対話の機会を設けた。会の終了後には場所を移動して任意での対話の場を用意した。会費は徴収せず、出入り自由とし、飲み物やお菓子は自由に持参してもらった。終了後の任意の対話は最大120分間であった。

実施日時：2025年1月11日（土）

13:00～16:00～18:00

会場：成城大学007教室

参加者数：88名

参加費：無料

告知：大学内インターネット掲示、キャンパス内ポスター掲示、授業での案内、大学公式ホームページ、大学公式SNS(facebook、X)、成城学園前駅構内掲示、『プリズン・サークル』公式ページ等

映画『プリズン・サークル』概要

官民協働の新しい刑務所「島根あさひ社会復帰促進センター」では、受刑者同士の対話をベースに犯罪の原因を探り更生を促す「TC（Therapeutic Community＝回復共同体）」というプログラムを日本で唯一導入している。この映画は、暴力や窃盗、詐欺などの罪を犯した4人の受刑者が、幼い頃に経験した貧困、いじめ、虐待、差別など自らの過去と向き合い、対話を通して、痛み、悲しみや怒りといった自らの感情や行為を深く認識し、それらを表現する言葉を獲得し、社会復帰に向けた新たな価値観を形成していく。彼らの内面に深く迫ることで、犯罪に潜む家庭環境や社会的孤独といった複雑な課題を明らかにする。取材期間10年超、日本で初めて「塀の中」の長期撮影を実現し繊細なプロセスを見届けた、坂上香監督によるドキュメンタリー作品。

（映画『プリズン・サークル』公式ページと書籍等をもとに筆者により編集）



映画視聴後の対話の様子

3-2 参加者の属性と参加理由・感想

上映会を研究の一環で開催するにあたり、研究倫理に基づき個人情報の取り扱いに関する参加者の同意を得た。具体的には、まず募集時点でアンケートの協力依頼を明記した。その後、申込者への事前メール、当日の開会挨拶時、さらにアンケート回答欄（配付・オンライン）にて、当日撮影した会場の写真とアンケートの回答は個人を特定しない形で報告・記事・論文に掲載する場合があること。また同様に、個人を特定しない形で坂上監督に共有すること。質問や問合せについては会場で直接筆者まで、あるいはメールにて1月20日迄に問合せ欲しいと連絡先を明示した。その結果、期日までに問合せ連絡はなかった。また補足になるが、上映会の中では一人ひとりを大事にしながら安全で安心な場を共に形成していくことへの同意を全員より得ている。

3-2-1 参加者の属性と参加理由

上映会の参加者88名のうち学生が25名、学生以外的一般（学内教職員を含む、以下；一般）が63名であった。内訳として、学生は成城大学を含む計10大学から参加があった。一般参加者の活動・場として例えば、教育機関、公共職業安定所、ボランティア協会、社会福祉士、キャリア・カウンセラー、成城学園からは教職員と在学生、保護者や卒業生も参加した。参加理由として主に、作品を（もう一度）観たい・興味がある、刑務所の現場を知りたい、TCについて理解を深めたい、当事者の変容プロセスを知りたい、自らが抱える課題に対してヒントを得たい、自分の成長の機会にしたい、上映会での参加者との対話に関心がある、であった。以下に参加理由の一部を抜粋して紹介する。

- ・この作品の書籍を読書会で取り上げ、映画を是非観たいと思った
- ・保育士専門学校の教育社会学の授業でこの作品が取り上げられ、関心をもった
- ・対話に関する学生団体に所属していて興味が湧いた

から

- ・子どもが通っている小学校で包括的性教育を話すサークル活動をしている。その中で刑務官から話を聞く機会があり、その方がこの映画を紹介していたので
- ・日本の刑務所での新たな取組みをキャリアの視点から考える
- ・当事者が対話の中からいかに回復が語られるのかのプロセスに関心がある
- ・受刑者が自分のことを語ることでどのような変化があるのかも関心がある
- ・人が人に心を開いていく過程に興味がある
- ・社会で様々な悲惨な事件が起き、いろいろな報道もなされている中で、ぼんやりとはあるが、犯罪者が果たして本当に更生できるのかと考えたりしている
- ・なぜ社会的排除性があるのか、特に受刑者目線から感じる（出所前・出所後の）社会的排除性について議論したい
- ・人間が人間らしく生きていくために必要なことを考えるきっかけとしたい
- ・自分の固定観念の破壊と更新

3-2-2 参加者の感想：上映会終了時のアンケート結果

上映会終了時のアンケートでは、映画視聴の感想と、参加者同士の対話を行っての感想を自由に述べてもらった。アンケートの回答者数は88名中67名（回答率：76%：2025年1月21日現在）、自由記述の回答文字数は総計26,180字であった。記述データを質的分析（コーディング）したところ、暫定的であるが表1のように3カテゴリー、17概念が生成された。以下に記述の一部を抜粋して紹介する。記述の文末には回答者の属性と該当する概念を記載した。尚、記述は文脈に応じて語尾の一部を改編している。

映画を視聴して感じたことなど

相談できる相手がいない、自分の帰る場所がない、自らの欲求と罪の意識との葛藤など、共感できるポイントがたくさんあった。その意味で、受刑者とそうでない人たちの違いは決して大きくないと思う一方、罪を犯した自分と向き合っている受刑者の皆さんは、自分よりよっぽど自己に対する内省をしていると感じました。少し変な感じですが、そのような体験が出来る受刑者の皆さんが羨ましいなと思いました（学生：3-1. 登場した4名と自分との共通点の内省、3-3.TCの体験や対話への関心、以下は概念番号のみを記載）。

表1 生成されたカテゴリー・概念

カテゴリー / 概念
1.TC 参加者に対しての感想
1-1. 心を開き本音で語れる場・対話の必要性
1-2. 聴いてくれる人の存在と信頼
1-3. 他者を通じた自分への気づき
1-4. 自らの行為や感情を認識
1-5. 自己と向きあう・探索する必要性
1-6. 人間は変われる・個々に物語を紡ぐ
1-7. 受刑者は加害者なのか被害者なのか
2. 社会・周囲の人々に対しての感想
2-1. 入所前後の予防とフォローアップの必要性
2-2. 映画に登場しない方々の現実と対応への関心
2-3. 犯罪の背景にある社会の現状と現実への疑問
2-4. 日本の教育の問題と改善の必要性
2-5. 被害者はこの取組みにどう思うだろうか
3. 自らに対しての感想
3-1. 登場した4名と自分との共通点の内省
3-2. 自らの偏見・無関心への反省
3-3.TCの体験や対話への関心
3-4. 解決への希望・自分にできること
3-5. 言語化しきれないもやもや感や疑問

私が印象に残った事は、登場していた受刑者の方々がそれぞれの言葉で伝えていたものが、自分が欲しているものと変わらない!?ということです。愛されたい、許されたい、受け入れられたい、理解されたい、幸せになりたい。それらが絶望的に叶わない孤独・不安・恐怖が大きく膨らみ抱えきれなくなって、彼らを犯罪に向かわせたのであれば、犯罪は誰しもが起こしうるものだと思えたとし、受刑者の方たちをととても身近な存在にも感じました（一般：3-1）。

私は専門的な知識もなく、職業でもなく、被害者にも加害者にもなった事がない一般的な子育てが終わりつつある世代の女性です。（中略）人は生きていれば大なり小なり思い出したくない出来事があります。私もあります。過酷な環境にいて青年になった彼らも何も変わりはない、普通の若い男の子、前科者だから普通では無いと彼らを切り離してはいけない…。もし、触れる機会があればどうやって接していこう…理解していこう…話をしよう、線引きをしない、全部を受け止めるだけの器はないけど、少しずつ寄り添う事はできる、「そうしたいな…」、この芽生えた感情を頭と心の片隅にきちんと保管して、新しい気づきがあれば増やして、いつでも引き出せるようにしておきたいと思います。少しでも多くの方にこの映画が届く機会が増える様に、微力の微力ですが伝えていきます（一般：3-4）。

一番驚いたのは、彼らの発する言葉の力強さと美しさです。特に拓也さんの物語は、まるで詩の朗読を聞いて

いるようでした。彼はもしかしたら、すごく本を読む青年なのではないでしょうか。拓也さんに限らず、自分の辛い過去や思いを、自分の言葉を絞り出すように語った全ての人は詩人でした。哲学者でした。言葉の力はものすごくパワフルでした。そして、字が美しかった。難しい漢字をキチンと書けていました。教育の力を感しました。壮絶な虐待、いじめ、差別を、おそらく全ての受刑者が経験しているのでしょう。その体験を完全に「過去の出来事」として、その体験に支配されなくていいということ分かち合い、安心して話せる人が、一人でもいいから近くに居て欲しいと切実に思います。TC卒業生がどうか、自分の人生を生きていて欲しい。人の心はもろく、しかく、立ち直ることも出来るのだと、映画を見て強く思いました (一般：1-1, 1-2, 1-6)。

叔父さん宅に強盗に入った人に被害者役の受刑者が質問を重ねるロールプレイで、被害者役の人が一緒に泣いているシーンに心を打たれました。残酷なことをするなと思いますが、自身の被害者の気持ちを思い、自分の言葉がブーメランのように刺さったのでしょう。涙を流しながら自分のしたことを受け止めている加害者の人も頑張ったと思いました (一般：1-3)。

心に孤独感や満たされなさを抱えたまま大人になっていたのを見て、いったい誰が加害者で誰が被害者なのか、わからなくなり考えさせられた (一般：1-7)。

彼らを被害者とすることで、犯罪の被害者はどのように思うのだろうか。被害者の側面と加害者の側面を行き来する苦悩と複雑さが印象的だった (一般：2-5)。

加害者が変わるのなら、被害者もそれを許す日がくるかもしれない。その先に、希望はあるのかもしれない (一般：2-5)。

対話を通して感じたことなど

様々な立場のかたが集まっていたことに驚いた。この映画に関心がある人は実はたくさんいて、互いに尊重しあえる社会は思ったより遠くない未来に実現できるのかもしれない (一般：3-4)。

グループに若い男性がおられました。あのような負の感情を男性同士で共有、解消する場面は普段からない、との事でした。女性にはありがちなことなので、その違いに驚きました。この社会の息苦しさは、マチズモもそ

の一因だと思う (一般：2-3)。

「社会復帰促進センター」という名称に対し、刑務所内はやはり社会ではないという意見があった。社会で生まれ、社会とは異なる場所で生活し、社会に戻るという過程に違和感を抱いた (学生：2-3)。

対話の時間があつたことで、胸の中に沸き上がっていた想い (最初は言葉にしづらかったもの) をそのままアウトプットできてよかったです。感じていたことを、自分の中でより深めたり、整理することにも繋がりました。視聴直後の私のグループは初対面同志、立場も年齢層も男女もバラバラの5人のグループでしたが、対話することで、一緒にいる温かさや繋がり、ちょっとした共同体感覚も感じられました。任意の対話会も、驚くほど熱心な分かち合いになりました。教育のひずみや、いじめ、社会問題など、同じような関心をもっている人が偶然集まったのも幸いだったようです。そこで出ていたテーマの1つに「加害者のご家族にもこの映画を見せられるだろうか?」がありました。当事者でないと分からない、繊細なテーマですし、結論的なものがあつたわけではありませんが「赦し」ということも含めて、このテーマが話題になれたのも場の安心感があつたからだったと思います。また、こうした対話を続けていくことの意義にも繋がっていきそうですね。個人的にもオープンダイアログについて、もっと学んでみたくなりました (一般：3-3)。

3-3 考察

考察の第1は、この上映会に参加する同士による視聴後の対話によって、新しい気づきが生まれるということである。すなわち、観て、感じて、考えて、他者に伝えるよう言語化し、語りながら意味づけ、他者との対話 (多様な意見を聞きながらの相互作用) により共感したり、葛藤したり、疑問をもつなどしながら、視野を拡げ新しい気づきを得るといったサイクルを繰り返している。このような真の対話には心理的に安全な場づくりが重要となる。

第2は参加者の感想の視点についてである。自由記述は主に以下7つの切り口に分類された。1. 参加者自らが社会の当事者 (ひとりの人間) としてできること、2. 参加者自らの仕事上の役割 (教育者、支援者等) としてできること、3. 参加者自らの人生と重ねての参加者自身の内面 (感情・想い)、4. 島根あさひセンターの取り組みやTCへの関心、5. 登場人物の観察・関心、6.

社会問題として現実社会を傍観する・批判する、7. 作品(映画)を批評する・疑問をもつ、であった。坂上監督のメッセージには、「本映画について、自分自身の中で、そして他者と語り合ってみてください。そして、この社会のあり方や自分にできることは何かを、考えていってくださいと嬉しいです。」とあった。映画が伝えたいことや坂上監督が伝えたいことと、参加者それぞれが映画を観て感じたことは必ずしも一致しない。映画を観る側の人生観、仕事観、自身のライフストーリーと、『プリズン・サークル』の展開との相互作用によって、内省が深化する。参加者一人ひとりにもそれぞれライフストーリーがあり、思い出したくない・触れたくない・言いたくないこともある。TC 同様に参加者自身の心から意識、無意識的に湧き出てくる感情が肝となる。このことはTCの現場でも、今回の上映会の場でも、そしてあらゆる対話の場で重要であろうし、そのような、委ねる・解放する・赦す対話が日常の中でどうしたらできるだろうか。

考察の第3は、前述した授業での学生の意識の変容と、今回の上映会参加者の意識の変容の違いについてである。授業ではゲスト講義、フィールド訪問、対話が全15回を通して繰り返され、時間を充て価値観・人生観が醸成されていく。一方で今回の上映会では単発だったこともあり、また内容的にも自己投影が比較的難しいこともあり、自己承認や具体的な行動には至りにくい。しかしながら異質な他者との語りの中の「意外性」や「偶発性」は各々のライフ・キャリアに何らかのきっかけをもたらすだろう。

4 実践的意義と今後の展望

上映会の終了時、他大学の学生が帰りがけに「意識高い系ね」などと言われない居心地で、同じ目的(プリズン・サークルに関心を持ち自らの意思)で集まった、初めて会う異質な他者(異なる属性、生活環境、年齢、価値観)同士で、素のまま安心して自由に感想を語りあえた。そして、同じ映画を観ながらも感想がまったく異なり、それらを分かちあえることがよかった」と言いながら、他大学の参加学生たちと会場を出て行った。会の進行の枠組みは最小限に、参加者間の偶発性を活かし展開を委ねることは、『プリズン・サークル』に関心を持ち年始の週末に自ら足を運んだ参加者によって実現した。このような「場」は参加者によって育てられ、その「場」の中で参加者が育っていく。この「場」を継続して準備したい。

前述した、キャリア支援・教育における社会正義の3つのプラクティス(下村2020)、すなわち、すべての層の存在を承認し様々な問題を聴く深い意味でのカウンセリング、個人が自己決定と問題解決を通して自ら人生を切り拓くエンパワメント、仕組みや制度の改善に向けて周囲や環境に働きかけるアドボカシーは、まさしくTCに在り、『プリズン・サークル』に在る。坂上監督からのメッセージ「自分にできること」を筆者も追究し実践していかななくてはならない。

尚、今回の分析は暫定的であるため、実践研究としての「映画視聴と対話を通じた個人の意識変容プロセス」については今後の研究課題としたい。

謝辞

本上映会開催にあたり、坂上監督に多大な支援をいただいた。参加者皆様と学生スタッフにこの場を借りて感謝を申しあげる。本研究は成城学園教育研究所の研究助成「社会正義を志向するライフ・キャリア教育の実践と意義の検討」(2024-2025年度)をうけている。

注記

- ¹ 本学ではキャリア教育をキャリアセンターが所管し、就職活動支援も含むキャリア支援と棲み分けながら・連携しながら、学生を支援している。
- ² 正式な科目名は「キャリア・プランニング・プログラムⅠキャリアの多様性と社会正義」だが、本稿では解りやすく「キャリアの多様性と社会正義」と表記する。
- ³ 研究課題:「社会正義を志向するライフ・キャリア教育の実践と意義の検討」(2024-2025年度)
- ⁴ 映画『プリズン・サークル』公式ページによる(一部改編)。
- ⁵ 坂上監督によるテキストメッセージでは、映画の制作から完成に至るまでのプロセスについて、続いて、映画封切り後に刑務所に関する制度的な改善があったこと、一方で社会的課題が依然として残ること、そして最後に参加者へ「自分自身の中で、そして他者と語り合い、社会のあり方や自分にできることは何かを考えてほしい」とのメッセージが送られた。

参考文献

勝又あずさ(2024)「キャリアの多様性と社会正義を志向するライフキャリア教育の実践」、『共生社会の大学教育』山地弘起編 東信堂、pp.46-70。

前田信彦(2020)「大学におけるキャリア教育と社会正義」

社会科学系学部 of 学生データ を用いた探索的分析 —」、立命館産業社会論集、56(1)、pp.131-153。

澤柳政太郎『新装版 教育論抄』成城学園教育研究所編（新潮社、2015）

下村英雄『社会正義のキャリア支援：個人の支援から個を取り巻く社会に広がる支援へ』（図書文化社、2020）